特集（第一部・ケース 1）

移住者・母・イスラム教徒のライフストーリー

—異文化社会での適応プロセスを描く—

キーワード
子育て，ロールモデル，ホスト社会，二文化併存，編入

福村真紀子・ソニア　スラマ

1. はじめに

外国にルーツを持つ子どもには社会での適応という課題があるが，同時にその子どもの親が移住者である場合，どのように異文化社会で適応していくのかについても検討する必要がある。発達段階にある子どもにとっては，心身ともに安定した親のもとで育つことが重要であるからだ。国際結婚や夫の経済活動の優先という理由で外国から移住した子育て中の女性は，家の外に仕事を持たない，あるいは持てないケースも多く，人間関係が希薄になりがちである。そうなると，孤立したり社会に溶け込めず自尊感情を喪失したりするというメンタルヘルスの問題が生じる。

本稿の主人公は，日本に暮らすチュニジア人のソニアである。ソニアは，同国人との結婚をきっかけとしてチュニジアから日本に移住した。チュニジアは，北アフリカに位置する共和国である。国民の多くはイスラム教徒であり，公用語であるアラビア語を母語としている。1881 年から 1956 年までフランスの保護領であったため，フランス語も広く使われている。ソニアも彼女の夫もイスラム教徒であり，アラビア語を母語としている。

本稿では，ソニア自身による日本での娘との暮らしに関する語りから，ソニアが移住先の日本でイスラム教徒のアイデンティティを保ちながらどのように子育てをし，異文化社会で適応していったのか，またそこでどのような問題を抱えていたのかを明らかにする。

本稿の筆者の一人である福村は日本語教育に携わっており，地域日本語教育の一つの形として，さまざまな国や地域にルーツを持つ親子が交流できるサークル「多文化ひろば　あいあい」（以下，サークル）[(1)]を運営している。サークルは，一つのトピックを巡って参加者同士で会話をしたり，一緒に料理をしたり，地域のコミュニティ農園で農作業をしたり，何か具体的な活動を共同で行いながらコミュニケーションを学んでいくことを趣旨としている。福村は，外国から日本に移住して子育て中心に生活する女性たちが，自身の人的ネットワーク構築を後回しにしてしまうことに問題を見出した。そして，彼女たちの孤立の問題を解決したいと考え，2010 年にサークルを立ち上げたのである。その同年，福村はソニアに出会った。

日本の社会において日本語を母語としない子育て中の移住女性たちは，言葉の壁，文化の壁が障害となり，人間関係をつくることに困難を抱えていることが多い。ソニアも，日本に来たばかりのころは言葉の壁，文化の壁の前で途方に暮れていた。そのような中，共通の知人を通じて福村はソニアと知り合い，ソニアにサークルへの参加を促した。福村は，知人からソニアを紹介される以前からソニアの存在を知っていた。自宅に近いスーパーマーケットで，ベビーカーを押しながら商品を見て回る彼女をよく見かけていたのである。すぐに外国人の親子だとわかる容姿も目を引いたが，それよりもソニアの表情が気になった。いつ見ても彼女の表情は固くて暗く，近づき難い印象があったからである。2023 年現在，ソニアと知り合ってから 14 年目を迎えるが，彼女の印象は最初に目にした時とは全く違う。彼女は常に笑顔で表情は柔らかく，会えば別れの挨拶をする時まで話し続ける。このようなソニアの変容を，異文化社会での適応と呼んでもいいのではないだろうか。彼女の異文化社会での変容の一因は，自分が生まれ育った場所ではない土地で，さまざまな困難を乗り切ったことではないだろうか。特に，出産，子育てという人生の大仕事を外国で成す，という業が彼女に自信をもたらしたと考えられる。

本稿では，ソニアによる，自身と娘との日本での暮らしの振り返りを通して，ソニアのライフストーリーを構築する。その上で，異文化社会での適応とはどのようなものだったのかを，子育てという側面から考えてみたい。ソニアによるライフストーリー構築にあたり，福村からソニアに以下の質問を投げかけた。ソニアは，それらの質問に答える形で，これまでの日本での暮らしについて，英語で断片的にライフストーリーを語った。

【福村からソニアへの質問】

Q1: What was the hardest thing about raising a child in Japan?

Q2: Did your daughter have some problems living in Japan?

Q3: What do you think about raising a child in a foreign country?
(advantages and disadvantages)

Q4: At what age was your daughter the most difficult to raise?

Q5: If your daughter had grown up in Tunisia, how would it be different now?

Q6: List as many good things about your daughter as you can.

Q7: List as many things that you have worked hard (gambatta)on in raising your daughter.

本稿では，ソニアが断片的に語った英語によるライフストーリーを，福村が日本語に翻訳してまとめた。その過程で，ただ英語に直訳した断片をつなげるのみではなく，ソニアと対峙してきた約 14 年間の記憶や書き溜めてきた手記をもとに説明を補足したり，エピソードを加えたりした。本稿の 2.から 5.で著すライフストーリーは，ソニアが第一人称で語るスタイルにした。第三者の視点よりもソニア自身の視点から語る表現の方が，彼女が日本で暮らしてきた道筋を，本稿の読者にリアルに伝えられると考えたからである。

2. 子育てのプロセス

本章では，子育てを主軸に，娘のライフステージごとに母親としてのソニアの語りを記述していく。

2-1 小学生のとき

私はチュニジアで生まれ育った。チュニジアは北アフリカにある。北と東は地中海に面していて，海の向こうはイタリアだ。チュニジアは日本から遠く，帰りたくても簡単に故郷へ帰ることはできない。

2001 年，私はチュニジア人の夫と結婚して日本に来た。夫は，仕事のために，私より先に日本で生活していた。彼は日本語が流暢に話せるが，私は来日するまで日本語を一度も学んだことがなかった。日本がテクノロジーとイノベーションにおいて世界のリーダーであることだけは知っていたが，日本の文化についてはほとんど知らなかった。「日出づるところの国」に足を踏み入れたその時，私の新しい人生が始まった。

来日して 3 ヶ月後に妊娠したが，病院で困ったのは，日本語が理解できないことだった。日本語が通じない私に，医師はジェスチャーによって私とのコミュニケーションを試みてくれた。しかし，日本人が一般的に使うジェスチャーには，私の国と違うものもあった。たとえば，日本では片手を開いた手の平にもう片方の手の人差し指を添えると「6」を示すが，チュニジアではそのジェスチャーは「5」を意味する。また，日本では親指と人差し指で輪をつくると，「問題ない」という意味の「OK」を示すが，チュニジアでは「0」を意味する。産科の診察で，お腹の赤ちゃんの発育が順調であることを伝えるために，医師が親指と人差し指で「OK」を示したとき，私は逆に何が不足しているのだろう，とひどく不安になったことがある。

妊娠中，お腹の中の娘の状態が変化し，私は出産前の 3 ヶ月間入院することになった。その頃，私は孤立していた。周りに夫以外の家族はおらず頼れるのは彼だけだった。しかし，彼は仕事でとても忙しかった。夫は，チュニジアと日本は社会のシステムが違うのだと言った。そして，十分なお金を家庭にもたらしているのだから満足すべきだと言った。しかし，私は外国である日本で，そのお金をどう使っていいのかさえもわからなかった。私には経済的な安定よりも話し相手が必要だったのだ。日本に友達は一人もなく，妊娠中の問題や悩みを共有する相手は夫だけだというのに，夫には頼ることができなかった。本当に心細く，近くに友達がいないことが，私にとって一番深刻な問題だった。

私は全く日本語が話せなかったので，入院に際して，英語が通じる医師と看護師のいる病院を探した。そして，新宿の，ある大きな病院に入院することができた。主治医は，アメリカに長年住んでいたという，非常に親切な女医だった。その主治医も看護師も英語が話せるし，さらにはいくつかのアラビア語の言葉も覚えてくれて，私にアラビア語で話しかけてくれた。他の入院患者には見舞いに来てくれる家族や友達がいて心から羨ましかったが，病院にはたくさんのスタッフがいて，私はかれらと話せることが心の底から嬉しかった。入院中，本当に幸せだった。2002 年に娘を無事出産して退院したが，入院生活を手放すのが悲しかった。家で一人きりで夫の帰りを待つ生活より，たくさんの人たちと病院で過ごす方が安心だし，ずっと楽しかったからである。

家に帰ってから，闘いが始まった。母親になることは，人生の中で最高に素晴らしい経験だが，多大なストレスをもたらした。周りには友達も知り合いもいないし，チュニジアの家族の助けを借りずに，どうやって日本で子どもを育てていけるのだろうかと，毎日不安でたまらなかった。実際，誰も私の子育てを助けてくれなかった。夫は毎晩仕事で疲れて帰ってきて，子育てを任せることは不可能だった。

娘が 2 歳の時，高熱を出した。夫に電話をかけたが，仕事で応じてくれなかった。やっと夫が帰ってきた時には娘の熱は 40 度にも達し，救急車を呼んだ。日本語が操れる夫が帰宅するまで，私には何もできなかった。言葉の壁と文化の違いが大きな障害だった。特に，不測の事態にぶつかると，誰に何をどう伝え，どのように助けを求めればいいのかがわからなかったのだ。

2-2　小学生

娘が小学校に上がると，二つの厄介な問題を抱えることになった。一つは，毎日のように娘が学校から持って帰ってくるお便りである。私は日本語のお便りが読めなかった。2023 年現在では，スマートフォンが日常の道具になり，便利な翻訳アプリケーションが世の中に溢れている。日本語が読めなくてもスマートフォンのカメラでスキャンすれば，アラビア語や英語に翻訳してくれるので，簡単に理解できる。しかし，娘が小学生の頃にはスマートフォンなど存在していなかった。私は，ある時，お便りに記載してあった「遠足にお弁当を持参させること」という指示を見逃した。そして，娘はお弁当を持たずに遠足に参加することになったのだ。娘には，悲惨な思いをさせてしまい，私は悲しくて仕方がなかった。

もう一つの問題は，給食である。私たち家族はイスラム教徒のため，豚肉，マーガリン，ゼラチン，ショートニング，アルコールなどは口にしてはいけない。娘に与えられる日本の給食は危険だった。夫が小学校を訪ね，娘の担任の先生にイスラム教徒の食事の戒律とハラールフードについて説明した。そして，娘に毎日お弁当を持たせることを提案した。先生は，私たち家族の宗教と状況を理解してくれた。しかし，小学校には，娘が使える冷蔵庫もなければ電子レンジもなかった。そこで，食べられないものを娘の配膳から外すため，先生が毎月給食メニューを私たちに送ってくれることになった。私は，メニューを読み解き，食材の成分を注意深く確認し，食べられないものを先生に知らせた。先生がとても協力的だったの

で，私たち家族は本当に幸運だったと思う。

食べ物に関しては，給食以外でも努力が必要だった。日本にも徐々にハラールショップが増えてきたが，娘が小さい頃にはほとんどなかった。よって，日本人が普段利用するスーパーで買い物をするより他ない。娘が「これ食べたい」とねだる食べ物は，イスラム教で禁じられているものがあった。ショートニングやマーガリンはいろいろな食べ物に入っている。ダメだと言うと，彼女の目が「どうして？」と尋ねた。私は彼女の目を見ると，イスラム教の戒律をきちんとわかるように説明しなければならないと思った。イスラム教の戒律を子どもに教育することは，非イスラム教国の日本では非常に難しい。アラブの国以外でもヨーロッパにはイスラム教徒が大勢いて，ハラールショップもたくさんあり買い物には苦労しない。そうではない日本では，日常的に努力が強いられるのだ。私は，辛抱強く，小さい娘にイスラム教徒の生き方を説いた。

2-3　中学生・高校生

娘が小学生の時から，彼女の宿題を手伝えないことが，私にとっては情けなく悲しいことだった。しかし，彼女は自分自身で学校の勉強を乗り越えた。両親がチュニジア人であるために，家庭には頼れる存在がないことを理解していて，一人で困難と闘っていたのだ。

娘が中学生の時，高校受験というチャレンジが与えられた。私は，娘の受験をサポートできなかった。日本語を自在に操れる夫も，日本の教育システムについては全く知識がなかった。よって，娘は，高校受験の説明会をはじめ，願書の取り寄せ，出願まで全部自分でやってのけた。大学受験も同様である。志望校選びも，私には全く手が出せず焦るばかりだった。しかし，夫は全く呑気で，娘の進路についてはほとんど関わらなかった。母親は父親とは立場が異なる。母親は，常に子どもの将来を考える存在だと私は思う。娘の将来は，すなわち私の将来である。私には，娘に対する大きな責任があるのだ。私は呑気な夫にいらつき，娘の進路選びと受験について毎日心配していた。しかし，当の娘は自分で志望校を選び，手続きも全て一人で行い，AO 入試によって見事に志望校に合格したのだった。

一方で，ティーンエイジャーの娘はファッションに興味もあり，服装のコントロールには少し手を焼いた。彼女の友達は短いスカートを好んで履いていた。娘も短いスカートを履きたがった。私は彼女にそのような肌の露出度が高い服装をしてほしくなかった。しかし，彼女の希望を頭ごなしに否定して，無理矢理イスラム教の戒律を強制することは避けたかった。厳しくしすぎると，きっと彼女はイスラム教を敬遠する。そして，家の外で私に隠れてイスラム教徒に禁じられていることをしてしまうだろう。だから，娘が短いスカートを買ってほしいと言ったとき，「今回だけね。次回はダメ」と言った。娘にイスラム教徒の生活を身につけさせるには，時には寛容さも必要だったのである。

2-4　大学生

娘が大学に入学したのは 2021 年である。大学生活はコロナ禍に始まった。大学生活がどうなることかと心配したが，2023 年現在，娘は日本人の大学生と同じように，電車でキャンパスに通い，コンビニエンスストアでアルバイトをしながら就職活動をしている。アルバ

イトを終えて家に帰ってくるのは夜の 10 時半くらいだが，日本はチュニジアに比べて治安がいいので過度に心配することもない。治安の良さは日本で生活することの大きなメリットだ。もちろん，デメリットもある。チュニジアは公立であれば大学まで学費が無料なのに対し，日本の教育費は非常に高い。しかし，大学を卒業すれば就職のチャンスがたくさんある。チュニジアではたくさんの若者が職に就けないでいる。よって，いくら教育費が高くても，私は気にしない。娘が良い仕事に就けるなら，高い教育費を払うことに不満はない。

母親の私から見ると，大学生になった娘は外見も内面も美しい。彼女は親に頼らず自立している。そして，寛大で，困っている人に積極的に手を差し伸べる。毎月のアルバイト代から，恵まれない人たちに対する寄付もしている。このような心がけは，彼女が子どもの頃から，私がイスラム教の教えとして，困難を抱えている人たちを助けるように伝えてきたからである。私には，彼女の輝く未来が見える。大学生活もあと 1 年半。やっと私は一息つける。

3. 娘との間にある言語の壁

本章では，ソニアによる異文化社会への適応と言語の関係について述べる。ソニアは，特に娘とのコミュニケーションについて言語の問題を抱えていた。以下は，娘との間にある言語の壁についてのソニアの語りである。

残念ながら，娘と私の間には痛ましい言葉の壁がある。娘の日本語の習得は，私よりずっと速く，私はとっくに娘に置いていかれてしまった。それは紛れもない現実である。このことで，私たちの親子関係は変化した。私は，彼女が小さい頃，彼女が日本人と同じように日本語を流暢に話せることを誇らしく思っていた。当時私は，娘にはまず自分が住んでいる環境の言語を習得し，そうすることで日本社会に溶け込んで人生を楽しんでほしいと考えていた。同時に，アラビア語を使うこと，母国に対するアイデンティティを保つことも望んでいた。しかし，娘が中学生になったとき問題に気づいた。その問題とは，私の日本語能力がそれほど高くなく，娘と十分に意思疎通ができなくなったことである。娘は，私の理解が及ばない難しい日本語を使うようになったのである。

加えて，娘のアラビア語の能力が低下していることもわかった。これまで娘はチュニジアに行ったとき，親戚とのコミュニケーションのためにアラビア語を使っていたが，チュニジアに行く機会はそう多くはなく，日本に暮らすアラブ人も限られているため，娘がアラビア語を練習する機会は非常に少ない。また，中学生になると，母親より学校の友達と一緒にいる時間の方が多くなり，アラビア語に触れる時間自体が減少した。私が娘にアラビア語で話しかけても，娘は日本語で応じるようになった。

特に宗教，習慣，娘の将来など，重要なテーマについて娘と話し合うことには，しっかりと通じ合える言語の不在という点で，大きな障害がある。娘のことを，まるで見知らぬ人のように感じることもあるのだ。娘は，日本語を母語として生活しているが，私は日本

語を母語としない外国人のままである。いまや，娘にとっては，アラビア語は外国語，チュニジアは外国という位置づけになってきている。一方，夫と娘の間にはコミュニケーションの問題はない。夫と娘は，日本語で通じ合える。娘の中学入学以降，私は彼女との間にある言語の壁に日々苦しむことになり，そのことが私と日本の社会の間にある距離をときどき感じさせる。特に，現在大学生の娘と，彼女のこれからの人生について深く話し合いたくともコミュニケーションがうまく運ばないことを，非常にもどかしく思っている。

4. 地域コミュニティへの参加がもたらしたもの

本章では，日本においてソニアがどのように異文化社会で適応していったのかを知るために，サークルについてのソニアの語りを示す。実際に，ソニアにとってサークルへの参加にはどのような意味があったのだろうか。

出産後もあいかわらず，私には地域に友達がおらず孤立していた。私は，子育てに関する悩みを共有できる仲間がほしいと思っていた。何度もチュニジアに帰ろうと考えた。しかし，娘が 8 歳になった時，転機が訪れた。同じ団地に住む隣人が，地域の親子サークルを紹介してくれたのだ。そのサークルは，私のような子育て中の外国人が，同じく子育て中の日本人と交流するためのサークルだった。サークルの活動は，概ね月に 2 回開催され，自分たちの好きなことや子育ての話題など，さまざまなことについて日本語でおしゃべりしていた。

このサークルに参加して，これまでの日本における 9 年間の生活が 180 度変わった。サークルにはさまざまな人たちが出たり入ったりしていて，たくさんの人たちと知り合うことができた。私は参加当初，さっぱり日本語が話せなかったが，英語が話せる参加者がいる時には通訳してもらえたので助かった。参加を重ねていくうちに，私が抱えている問題について他の参加者からアドバイスをもらったり，その人たちを通して日本の文化，習慣，伝統，ルールを学んだりするようになった。そして，それらを学びながら，徐々に他の参加者たちとコミュニケーションが取れるようになった。さらには，サークルの参加者から仕事も紹介してもらった。その仕事とは，公立高校の英語授業のアシスタントである。日本人の先生と一緒にクラスに入り，英語の発音のモデルを示すなどした。私はその高校で「ソニア先生」と呼ばれていた。

また，サークルでは，私が活躍できるチャンスもあった。最初は，チュニジアの紹介である。私は，自分でチュニジアの地図を書いて，国の特徴などについて他の参加者に紹介した。また，時々チュニジア料理を他の参加者に教えるチャンスもあった。私は，他の参加者が珍しいと思うチュニジア料理を選んだ。これをきっかけに地域の祭りにチュニジア料理を出店したこともある。大学生が企画する親子イベントの手伝いもした。かれらの役に立つことを通して，私には力が湧いてきた。私は，自分を外へと開く，つまり社会に対して新しいチャンネルを開いた気がした。私に湧いてきた力は，「私は何かができる存在だ」という，自分を信じることから生まれた。そして，もっともっと自分を社会に開いて，何かをしなけれ

ばと思うようになった。

サークルへの参加を重ねる中で，私は活動的になっていった。日本語が自在に操れない，文化や宗教の違いを越えるのが厳しいなど，自信を持てなかった自分に，私にとって外国である日本で何かができると思わせてくれたのは，サークルのおかげである。

娘の学校では，親同士のコミュニティに入ることはなかったが，サークルには自然に溶け込めた。それは，このサークルの参加者が，外国人がもともと持っている文化と，外国人の存在自体を尊重してくれたからだと思う。さらに，2011 年 3 月の東日本大震災の時，私は言葉の壁により情報が得られなくて困っていたのだが，サークルにつながっていたため，英語で情報をくれる人たちがいて本当に助かった。

地域コミュニティに参加することは，孤立からの脱却にもなるし，自信にもつながる。さらに，仕事や情報も得られるし，私に転機と大きなチャンスをもたらしたのである。

5. 併存する二つの文化の中で適応するために

本章では，異文化社会での適応と宗教の関係について考えるため，チュニジアの文化と日本の文化が併存する状況で生きることについて，ソニアが語ったことを示す。

私が，これまで子育てをしてきた過程で，最も嬉しく思っていることは，さまざまな困難があったものの，併存する二つの文化の中で娘を適応させることができたことだ。自分が生まれ育った国ではない国，特にイスラム教ではない国で子育てをする上で，言葉の壁と文化の違いは，大きな障害になった。しかし，私が娘を出産してから 20 年以上経った現在，言葉の壁は大した問題ではないと考えている。来日した時に比べて私の日本語能力が向上したことも，もちろんその理由の一つだが，上述したようにスマートフォン上の翻訳アプリケーションを使えば，日本語はいまや意味不明の外国語ではない。娘が小学生の頃，私は一緒に漢字を勉強した。しかし，今はたとえ漢字の読み書きができなくても，生活にはほとんど支障はない。

一方で，文化の違い，特に宗教の違いに対処することは，今でも私たち家族にとって非常に高いハードルとなっている。日本には，時節ごとに豆まき，ひな祭り，七夕などの行事がある。娘の友達はそれらを家庭で祝う。娘は，友達と違って私たちにその慣習がないことに，少なからず違和感を持っていたと思う。最近では，夜遅くカフェで友達とおしゃべりしている娘に電話をかけ，すぐ帰宅するように言いつけると，娘は友達から「お母さん，怖いんだね」と言われると愚痴をこぼしていた。女性が夜遅く出歩くのはイスラム教では良しとされない。

振り返ってみると，非イスラム教国での子育ては，決して簡単とは言えなかった。しかし，努力をすればできないことはなかった。私は，これまで文化，特に宗教の違いという障害を非常に忍耐強く乗り越えてきた。自分自身がチュニジアの文化と日本の文化の中で適応することも難しかったが，娘を併存する二つの文化の中で適応させることはもっと難しかっ

た。しかし，私は，娘をイスラム教徒としてのアイデンティティ，そして日本で生まれ育ったチュニジア人としてのアイデンティティを彼女の中に育て，維持してきた。彼女が日本の文化とチュニジアの文化の狭間にある溝の中で迷子にならないように，私は努めて彼女のいる世界を楽しいものにしようとした。問題が生じると，その問題から逃げないで，しっかり向き合い解決することに尽力した。食事や時節の行事など，慣習の違う日本の社会で適応するために，私たち親子は甚大な努力と忍耐を要したのである。

私と同じイスラム教の国から日本に移住した知り合いの中には，日本の文化や習慣に馴染めず不平ばかり言っている人たちがいる。私はそのような人たちの不平を聞くと，「国に帰りなさい」と言いたくなる。日本に移住したからには，ここに暮らす人たちの文化や習慣を学び，尊重しなくてはならない。日本の文化と習慣を尊重することと，イスラム教の思想，文化，習慣を守ることは決して拮抗しない。自分の中で二つの文化は両立できるのだ。それはもちろん簡単ではないが，努力をすればできる。私には，日本においてもイスラム教徒の仲間たちとのネットワークがあるが，その人たちとばかりつきあわず，地域の親子サークルに参加して以来，なるべくたくさんの日本人たちと接してきた。サークルへの参加を通じて特に子育て中の日本人と時間を共有することができた。たとえ日本語を自在に操れなくても，言語ではなく心でつながることができたのだ。そして，かれらからは，日本の文化と習慣を学ぶことができた。

私は，私自身が二つの文化を両立する姿を娘に見せてきた。そうすることで，娘も二つの文化の中で適応できたのだ。すなわち，私が地域のコミュニティに積極的に参加すること，同時にイスラム教の戒律を守り，毎日何回も祈ったりコーランを読んだりすることを娘に見せることで，娘は日本とチュニジアの文化の二つを自分の中に取り入れることができたのである。私は，非イスラム教国の日本で，周りの日本人の生き方を尊重しつつも同化せず，バランスを取りながら生きてきた。実際に，日本とチュニジアは全く違う国である。私はその違いを楽しんできたとも言える。

私は，娘にとって貴重なロールモデルである。娘が併存する二つの文化の中で適応するために一番重要なことは，私がしっかりとイスラム教の文化と習慣を守り，同時に日本でたくさんの日本人たちと交流し，思い切り人生を楽しむことである。

6. ソニアによる異文化社会での適応プロセスから見えるもの

上記 2.から 5.まで，日本における自身と娘の暮らしについて，親の視点によるソニアのライフストーリーを著した。6.では，ソニアによる親としての異文化社会での適応のプロセスを移住者のメンタルヘルスという視点から考察する。

6-1　二文化併存

5.で述べたように，ソニアは娘を異文化社会である日本の文化とイスラム教徒の文化の二つの文化の中で同時に適応させるため，彼女自身が二つの文化を両立する姿を娘に見せてきた。このような日本でのソニアの生き方を「二文化併存」という概念を通して考えてみた

い。

ブグラ・グプタ（2017）は，「移住者は新たな文化がもたらす影響と，新たな文化と自文化の相互作用に，さまざまな方法で適応する」（p.113）と論じる。ここでは，新たな文化での適応の方法として「同化」「分離」「二文化併存」の三つの方法が挙げられている。「同化」については，「ホスト文化の特徴を取り入れ，2 つの文化の不協和を軽減する傾向がある（同化）。これは，出身文化の特徴を一部保持し，一部放棄しつつ，自己のアイデンティティを再定義する複雑なプロセスである」（pp.113-114）と説明している。一方，「分離」を，「「同化」に苦労し，距離をおく」（p.114）ことであるとする。そして，「二文化併存」は「ホスト文化の一員になると同時に，自文化のアイデンティティも保持できる」（p.114）状態であるとする。

ソニアは，まさに日本というホスト社会で「二文化併存」という手立てによって適応していったと言えるのではないか。イスラム教徒としての戒律の遵守という面からは，娘の学校給食を完全に避け，弁当持参という手段が一番安全であったはずである。しかし，ソニアは，弁当づくりと学校での弁当の保管の問題が理由となってはいたものの，娘から学校給食の機会を奪うことはしなかった。学校側から 1 か月分の給食のメニューを入手し，時間と労力を費やして丹念に食材を調べた。そして，避けるべきメニューを学校側に知らせ，娘が学校で他の子どもたちと一緒に給食の時間を過ごせる機会をつくったのである。

また，4.で述べたように，ソニアはイスラム教徒たちのコミュニティを唯一の居場所とすることなく，親子参加型のサークルという地域のコミュニティに入り込み，積極的に日本人との人間関係を構築していった。子どもが通う保育園または幼稚園や小学校で他の親たちと人間関係をつくり，社会に適応していくケースは多々あるが，ソニアは違った。ソニアは，１.で言及したサークルに娘と一緒に参加したことをきっかけの一つとして，ホスト社会で適応していったと考えられる。ソニアは，2010 年にサークルが立ち上がった当初からの参加メンバーで，2023 年現在も積極的に活動に関わっている。参加当初は，日本語が理解できないため他の参加者とのコミュニケーションもままならず，周縁に取り残されている印象があった。しかし，サークルで機会を得て，チュニジアの紹介をしたり，チュニジア料理を他の参加者に教えたりしているうちに，サークルにおける自分の位置を徐々に中心へと移動させてきた。サークルでは，年 1 回，近隣の大学と連携して親子向けの多文化交流のイベントを開催している。そのイベントは大学生が中心となって親子が一緒に遊べる活動を企画している[2]。毎年，イベント本番前にサークルのメンバーと大学生が交流する機会を設けるのだが，福村はソニアにチュニジア料理を大学生と一緒に作ってもらえるよう依頼したことがある。その際，ソニアは料理の下ごしらえを入念にして来て，学生たちを楽しませており，自身も非常に楽しんでいた。チュニジア料理の紹介は，サークルの参加者の中ではソニアにしかできない業である。このような個性を生かす業も，自文化のアイデンティティを保持することにつながると考えられる。彼女は，出身文化の特徴を放棄せず自文化のアイデンティティを保持しながら，サークルの日本人参加者と積極的に関わりつつ周縁的な参

加から中心的な参加へと立ち位置を移動していった。つまり，ソニアは主体的にホスト社会の一員になるための努力をすると同時にチュニジア人とイスラム教徒としてのアイデンティティを保ち続けたのである。

ブグラ・グプタ（2017）は，移住が及ぼすアイデンティティについて考察し，「個人の内面のアイデンティティと，外部の世界に向けたアイデンティティの相互作用は，アイデンティティの混乱（Arnett, 2002）と葛藤を引き起こす」（p.107）と述べている。しかし，ソニアの場合は，イスラム教徒として生活することの困難さと人間関係を構築できないという孤立感によるアイデンティティの混乱および葛藤に陥る危険に晒されていたものの，自身と娘の「二文化併存」の実現を強固なまでに意識し，ホスト社会つまり異文化社会で生き抜いてきたのである。

6-2　編入

ルイズ他（2017）は，「移住と定着のプロセスの間，移住者の文化はホスト社会の文化と接触する。多くの場合，この接触が対立を招き，これらの対立が双方の構成員にストレスをもたらす。しかし，ストレスのレベルは移住者の方が高い」（p.257）と論じている。このストレスは「文化変容ストレス」（p.257）と呼ばれる。ここまでに見たソニアの語りから，彼女も「文化変容ストレス」に苦しんでいたことがわかる。

また，ルイズ他（2017）は，「移住者集団の構成員と多数派／ホスト社会の構成員との間の文化的相互作用」の結果を「統合（integration），同化（assimilation），分離（separation）または拒絶（rejection），周辺化（marginalization）」（p.258）の四つに分類している。「統合」は「移住者側からすれば最も健全な帰結となるが，これは移住者自身の文化を保持し，多数派／ホスト社会の構成員との接触および相互作用を促進するときに生じる」（p.258）結果である。「同化」は，「移住者が自文化を拒絶あるいは否定し，多数派／ホスト社会の構成員との相互作用と接触を促進するときに生じる」（p.258）結果で，「分離」と「拒絶」は「移住者が自文化を保持すると同時に，多数派／ホスト社会との接触や相互作用を拒絶するときに生じる」（p.258）結果としている。さらに，「周辺化」については「移住者が自分自身の出身文化を拒否すると同時に，多数派／ホスト社会との接触や相互作用の促進も行わない」（pp.258-259）結果であると説明している。ルイズ他（2017）の説明にしたがえば，移住者にとって最悪の状況が自文化とホスト社会の文化の二つを否定する「周辺化」となるが，ソニアはどちらの文化も尊重し，「統合」によって「文化変容ストレス」を軽減していたと言えるだろう。

ソニア自身も，これまでの福村との対話の中で“integration”という言葉をよく使っていた。しかし，福村は，ソニアの口から出る“integration”は，ルイズ他（2017）が用いる「統合（integration）」の意味に重なると考えつつ，日本語の「統合」に収斂してしまうことには違和感があった。ソニアとホスト社会の構成員との相互作用は，「統合」ではなく，「編入」が相応しいのではないだろうか。「編入」については，渡戸（2017）が Portes and Zhou（1993）を引用し，以下のように論じている。

A.ポルテスらは，移民の同化プロセスは分節化されているとする「分節同化理論（segmented assimilation theory）を構築した（Portes and Zhou 1993）。そして，分節同化理論を構築する際，ポルテスらは「編入モード（mode of incorporation）」という理論的枠組みを導入し，移民の送出国からの離脱条件と移住先での受入の文脈といった構造的要因と，移民自身がもつ人的資本との相互作用に着目して，移民集団がさまざまな形態で受入社会に定着・定住していくことを説明しようとした。移民集団は受入社会に一様に同化していくのではない。（渡戸 2017，p.116）

上記の「編入モード」は，移民の同化プロセスを分析する上での分析概念と理解してよいだろう。この「編入モード」の「編入」について渡戸編（2017）は以下のように説明している。

「編入（incorporation）」とよく似た概念に「統合（integration）」がある。「統合」概念がどちらかと言えば国家による「上からの権力の作為や介入」といった性格を帯びるのに対して，「編入」は移住する主体の性格や異なる国家社会への参入過程の文脈をより多次元的・複層的に捉えようとするところに積極的な意義を見出し得る。（渡戸編 2017，pp.ⅸ-x ）

また，「統合」がホスト国家社会から移住主体に向けた一方向の介入のプロセスであるとすれば，「編入」はホスト社会と移住主体の双方が相互作用を通じてともに変容していく過程であると言えよう。（渡戸編 2017，p.x ）

上記の渡戸（2017）の論述から，「編入」は移住者の主体性を重視した概念だと考えられる。6-1 で述べたように，ソニアは「二文化併存」を強く意識し，積極的にホスト社会にアプローチしていった。それは，娘にも同じように「二文化併存」を促すことが主な目的だった。このようなソニアの姿勢は，「郷にいれば郷にしたがえ」という消極的な姿勢ではない。日本に移住してからのソニアは，宗教と言語を含む多次元的・複層的な文化を自分の中に育てていったと思われる。そのプロセスは「編入」と捉えるのが妥当であろう。

6-3　編入，その先へ

2023 年現在，ソニアと福村の付き合いは 14 年目となった。今では，最初にスーパーマーケットで見かけた時の暗いイメージは全くなく，すっかり日本という異文化社会に溶け込んでいるように見受けられる。「二文化併存」については，日本に来た頃より努力は少なくてよいかもしれない。心配なのは，じきに娘も就職してソニアのもとを離れることになるのだが，娘に深い愛情を注ぎ続けているソニアが，簡単に子離れできるとは思えないことである。近い将来，これまで娘の世話に捧げてきた時間を，ソニアはどのようなことに置き換えるのだろうか。いずれにしても，彼女は自分の中の文化を更新し，異文化社会での「編入」

を深めていくだろう。娘のロールモデルであろうとする限り。

【注】

(1) 「多文化ひろば　あいあい」については，福村（2015）を参照のこと。

(2) 本活動については，福村・三代（2021）を参照のこと。

【引用文献】

(1) 福村真紀子（2015）「移住女性のストレスと地域日本語活動–参加者の声に耳を傾け，「対話」を生み出す実践を目指して–」『言語教育実践イマ×ココ–現場の実践を記す・実践を伝える・実践から学ぶ–』3，2015 年，84-99.

(2) 福村真紀子・三代純平（2021）「公共日本語教育のための実践研究–官学民による「親子 de 国際交流–」プロジェクト」『東京外国語大学国際日本語研究』1，103-118.

(3) ブグラ，ディネッシュ・グプタ，スシャム（2017）「グローバリゼーション–国内の境界および国外との境界–」ブグラ，ディネッシュ・グプタ，スシャム編『移住者と難民のメンタルヘルス–移動する人の文化精神医学–』（野田文隆監訳），明石書店，101-118.

(4) ルイズ，ペドロ・マギー， I，キャロル・ユシム，アナ（2017）「移住者のメンタルヘルスに対する文化変容ストレスの影響」ブグラ，ディネッシュ・グプタ，スシャム編『移住者と難民のメンタルヘルス–移動する人の文化精神医学–』（野田文隆監訳），明石書店，254-270.

(5) 渡戸一郎編著， 塩原良和・長谷部美佳・明石純一・宣元錫編（2017）『変容する国際移住のリアリティ–編集モードの社会学–』ハーベスト社

(6) 渡戸一郎（2017）「「編集モード」から見る日系ブラジル人の位置と第二世代の課題–リーマンショック後の外国人集住地域の事例を通して–」渡戸一郎編著，塩原良和・長谷部美佳・明石純一・宣元錫編『変容する国際移住のリアリティ–編集モードの社会学–』ハーベスト社，114-136.

(7) Arnett,J.J. (2002).The Psychology of Globalization. American Psychologist, *57(10)*, 774-783.

(8) Portes, A., & Zhou, M. (1993). The New Second Generation: Segmented Assimilation and Its Variants. *Annals of American Academy of Political Science, 530,* 74-96.

（福村；茨城大学／ソニア　スラマ；アラビア語・英語講師）